

緑のまぎば

三十五周年記念号

2001 No.34

小金井緑町教会
小金井市緑町四一六三三
電話〇四二三八一七九六一
編集・牧師 山畑 謙

教 説

『慰めのパン』

山 畑 謙

主がわたしの助けとなってくださなければ、わたしの魂は沈黙の中に伏していたでしょう。「足がよろめく」とわたしが言ったとき、主よ、あなたの慈しみが支えてくれました。わたしの胸が思い煩いに占められたとき、あなたの慰めがわたしの楽しみとなりました。

(詩編九四・一七〜一九)

最初の教会の指導者となった使徒パウロという人は、現在のトルコからギリシャの町々を巡り、キリストの福音をのべ伝えていきました。その途上、様々な苦難を受け、「耐えられないほど酷く圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまった」(二コリント一・八)事さえあったと言います。しかしそのあらゆる苦難に際して、慰めを受けてきたので、私たちが苦難にある人たちを慰めることができるのですと、コリントという町の教会の人々に語っています。その「慰め」とは、倒れそうになっている者を下から支

えるという事を表している言葉なのです。

イエス・キリストを主と呼ぶ時、それは奴隷に対して絶対的な権威と力を持つ主人の事を意味しています。しかし、主イエスの主人としての絶対的な力は、上から下へと強圧的に人を動かし支配するものではありませんでした。様々な苦難の中で肉体的にも精神的にも弱り果てて生きる望みさえ失ってしまうような時に、まるで後ろから両脇を抱えるようにして支えてきてくださった。慰めを戴くとは、十字架を通してこの主なる方が私

の味方となって今もかたわらにいてくださるという事を知る事でありました。

慰めは自分で作り出せるものではありません。慰められる、すなわち下から支えられて、初めてそれを人に伝えていき、人にもたらししていくことができるのです。かわいそうな人を、少しは幸せな境遇にある自分が慰めてやろうとするのではありません。あるいは何か相手の苦しみを特別に共感できるものを持っているから慰めてあげられるものでもない。本当のところ、人の苦しみなど自分にはろくにわかっていないのではないかと思えます。そんなにつらい経験をした事もなく、のほほんと幸せに暮らしてきた人間が、どん底と思えるような苦しみを味わっている人の苦しみを共感し、わかる事がいったいどれほどできるかと言え、できないと言うべきでしょう。苦しみを共感する事に頼った慰めはすぐに限界が訪れるでしょう。

では、私たちはどのようにして慰めを戴くのでしょうか。たった五つのパンと二匹の魚で男だけで五千人を満腹にしたという奇跡があります。パンは分け

ても分けてもなくならず、すべての人を満たしたというのです。最後の晩餐の席で、主イエスは「これはあなたがたのためのわたしの体である」と言ってパンを裂いて分け与えられました。それは十字架の赦しを表すものでした。パウロもかつてキリスト教徒を激しく迫害する者で、酷い事を散々してきた消し難い過去があります。しかしそんなパウロに主イエスは、同じ赦しのパンを手渡されたのです。それはお前の罪をすべて赦し、お前の味方となってどこまでもお前と共にいようという慰めでした。それは罪のため共に生きる者を次々と失って、ついに誰もいなくなってしまう孤独の中でくずおれてしまう所で、下から支えようとする方がかたわらにあるという事でした。下から支える慰め、これが尽きることはないパンのように、パウロはコリントの教会の人々に、そして私たちに手渡そうとしているのではないのでしょうか。そして今度私たちの手の中にある慰めのパンを、そばにいる人に分けることができるでしょう。